隨筆欄 (8)

武者小路氏の絵へ送ひ込む

吉保

冬の郊外

三木露風

稲穂の匂ひ香はしいみぢに、
唯一人の農夫が働いてゐる。
夕陽は今落葉色の光を投げる。
鳴き弱つた蟋蟀が
その稲穂の中に琴を立てる。
最早秋になる冬の空氣に、
静寂そのものが憩ひ、
平安と労働の疲れとが、
遠くの農耕の金音にも慣ちる。
かくて一日の終りがくる。
山の背後は黄昏が無らすたらくと
子供心に見やる童子、
その影をいとほしみつゝ父が手をひいて、
とある路を通りかゝり、
農夫と語る。

651

文藝春秋
632

大事件が出ってりく
郊外の新設線電車が
彼等の話題になる。
さうして枝葉を茂く烟が
落く彼等を籠める。

夕よ。冬の夕よ、
今にぱらぱらと時雨が来て、
田園の詩情も濃やかにし、
塀末から一筋の道にも
陰影の優しさをあたへるだらう。

10
20
W 松屋特製